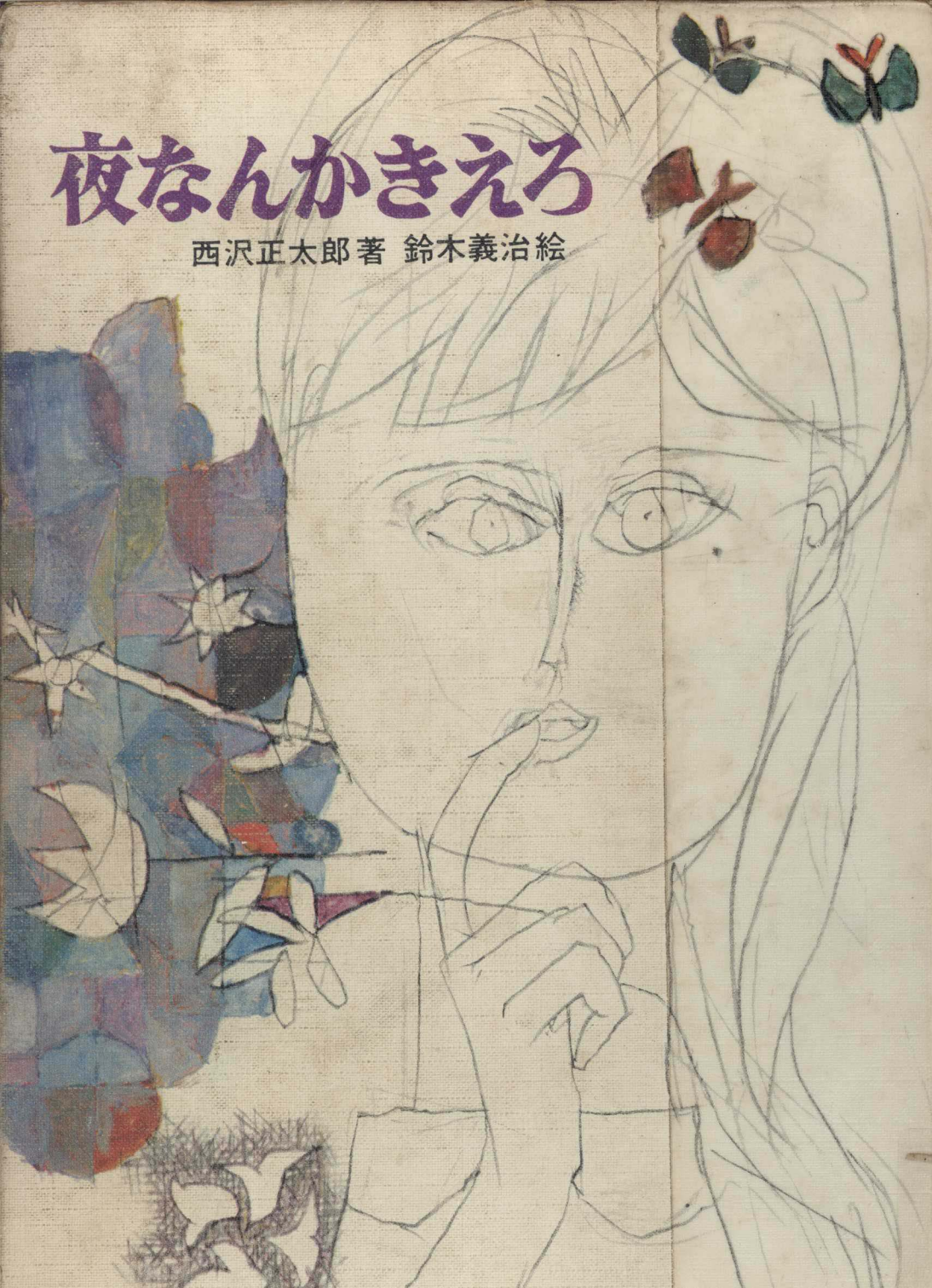


夜なんかきえろ

西沢正太郎 著 鈴木義治 絵



夜なんかきえろ

西沢正太郎



913.6 西 沢 正 太 郎

夜なんかきえろ

新日本出版社 1971

198P 21.5cm (新日本創作少年少女文学9)

西 沢 正 太 郎

にし ざわ しょう た ちろう

1923年、埼玉県に生まれる。中央大学法科卒、1050年教員生活にはいり、現在に至る。『夜なんかきえろ』で第一回現代少年文学賞を受賞。

日本児童文学者協会、日本児童文芸家協会、日本児童文学学会会員。

主な著書「プリズム村誕生」(講談社)「青いスクラム」(東都書房)「野っばらクラス」(盛光社)「クリスタルの花」(牧書店)「ヤッポのさけび」(毎日新聞社)など。

鈴 木 義 治

すず き よし はる

1913年、横浜に生まれる。二科、三軌、旺玄会などに出品、各賞を受賞。

「天文子守唄」(理論社)「プチコット村へいく」(新日本出版社)など、数多くの装丁・さし絵を手がけている。

新日本創作少年少女文学9 夜なんかきえろ

1971年 4 月 30 日 第1刷発行©

定価 560円

著 者 西 沢 正 太 郎

画 家 鈴 木 義 治

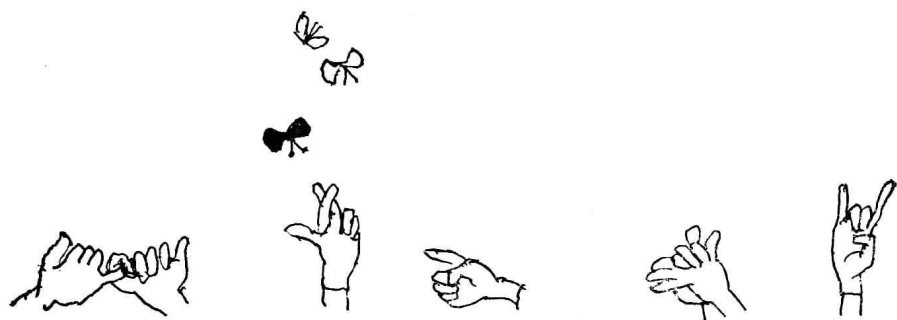
発行者 松 宮 龍 起

郵便番号 102番 東京都千代田区富士見2-13-14
発行所 株式会社 新日本出版社
電 話 (262) 4732 振替東京 13681番

落丁・乱丁がありましたらお取替えいたします。(鎌倉印刷・古賀製本)



*
も
く
じ



わゴムクラス

6

夜なんかきえろ

36

マジック・インキ

52

あなぐら

72

青い少女

100



あとかき

196

冬のウグイス

174

ブロッケンの輪

154

霧の山の耳

136

一つのもの

122

菱丁・さしえ

鈴木
義治

夜なんかきえろ

わゴムクラス

1

(運動会^{うんどうかい}は終わっちゃったし、これから、おくれをとりもどすために、ピシピシ勉強するって、カクヤス先生は、はりきっていたし、つまんないったらありやしない。

でもさ、学校ちゅうところは、九月は運動会でもちきりなのによろ、どうしてほかの国語や算数や社会の勉強するところが、半分にへらしてないだべ。半分にしていれば、毎年のように、おくれをとりもどすなんて、むきになった先生に気合いかけられないですむのになあ。そこんところが、おらにやわかんねえ。)

朝の始業^{しぎよう}のチャイムが鳴って、しまいから二番めに四年松組の教室にかけこんできた村治^{むらじ}は、めずらしくおしゃべりをわすれて考えこんでいた。

村治の席は、窓ぎわ^{まど}のまん中の席だ。四年生は、鉄筋三階^{てつきんさんかい}校舎^{こうしゃ}の二階に陣^{じん}どっている。おじいさん



の代からの古い校舎が、五年前あらしにやられて傾いたとき、はやりの鉄筋校舎に建てかえられたのだ。一年と二年は、まだ、あらしにまけず生きのこった平屋の古い校舎を使っている。

「まごどもは、しあわせだに。」

村の年よりたちは、この新しい校舎を見上げて、うれしいような、そのくせ「えらくお金がかかったべ。」という顔つきで、ふーっとためいきをついたものだが……。

とにかく、市にのみこまれたもとヤマダ村の市らしいところといったら、このヤマダ小学校の鉄筋校舎くらいのものでろう。もっともずっとはなれたオオツカ駅の付近は、もう団地が、どんどんひろがっている。

村治の席からは、村らしいところがまる見えだ。校門の前のなんでも屋の店と、三げんほどの農家が、ケヤキやカシの小さな林にかこまれてあるほかは、いちめんの田んぼだ。

（夏のうちヘリコプターで、二回も空から消毒したので、ことしのイネの実りも上々だって、とうちやんがいった。そのかわり、イナゴなんか、さっぱりいなくなって、いまの子どもはつまねべってなあ。

でもさ、カエルとドジョウなら、いっぱいとれるぞ。そのカエルでザリガニつるんだけど、あいつは、去年のように、ばかみたいにくいついてこなくなっちゃった。）

村治は、ほおひじついで、つぎからつぎとそんなことを思いだしていた。

ちらつと黒板^{こくばん}の方を見ると、学級委員^{がくきゅうい}の山梨ユカが、立ったまま教卓^{きょうたく}によりかかって、むつつり口をむすんで漢字^{かんじ}の練習^{れんしゅう}をしている。それでも村治^{むらじ}は、いま、朝自習^{あさじしゅう}で、漢字を書く時間だということに思いつかなかった。

（ユカのやつ、このあいだおもしろい詩書^{ししよ}いたな。）

その『ヒガンバナ』の詩は、うけもちのカクヤス先生にほめられて、ろうかのけいじ板^{ばん}にはってある。金賞^{きんしょう}の紙がついている。

いくつも、小さな花があつまって、

ちりんちりん、赤くもえている

ヒガンバナ

夏のつかれが、でたように、

雑木林^{ぞうきりん}のみどりが、

すっかりよごれてしまったこのごろなのに、

ヒガンバナだけが、

によっきによっき花のえをもち上げて、

いっせいにさきだした。

すると、林ぜんたいが、元氣づいて、
にぎやかになってきた。

でも、見かけはともきれいだけど、

みんな毒花どくばなだっていつている。

葉っぱがないせいかもしれない

ふしぎな秋の花だ。

（へっ、見かけはきれいだけど、毒があるんか。まるで自分のこと書いてるみたいなどこあるな。）

村治は、もう一度、うつむいたユカをみて、胸むねのおくでつぶやいた。

（つんと、両側りょうがわにふりわけてたばねた髪かみの毛けが、ひげのようにはねてもち上がっている。細っこい顔
だけど、笑わらうとかわいらしいとこあるな。いつか、良夫よしおのやつが、マンション美人びじんだなんてからかつ
たけど、女の子の間では、女王さまぶってる。そのいばるところが、ドクみたいに、おらきらいなん
だ。）

村治は、去年の春転校てんこうしてきて、駅前ふくじの富士マンションに住みついてしまった山梨ユカに、正直しやうじきな
ところ頭あたまが上あがらない。

（ああ、あ、空はまっ青さおだし……。）

こんな日に、とじこもっているなんて、ばかきいとはかり、村治の目が、また窓の外にうつりかけた。

と、にわかに、キーンとした声で、村治の首ねっこはおさえつけられてしまった。

「もう、練習できたでしょ。これから、いつものように、十題テストをするから、用意してえ。」

胸をはってみんなを見わたすユカが、にやっと笑って、立っている。べつに村治をにらんでいるわけではない。朝自習係でもあるユカは、二十分間、先生の代わりをつとめることになっている。

そのあいだ先生たちは、職員室で、朝のうち合わせをしているわけだ。

この「四松」のうけもちは、この四月から初めて先生になったばかりの角井安子先生だが、朝自習の成績は、ばつぐんだ。六年生の生活委員から、いつもほめられっぱなしである。

だから、シンマイの「カクヤス先生」の評判は、なかなかである。というのも、男まさりのユカが、はばをきかせているからだ。

少年たちは、むりやりしぶつ柿の顔をならべながらも、教室の中では、ちんとしてゐる。

「たまには、男の子だって、わたしたちを負かして。」

ユカは、自信たっぷりな口調で、みんなを見わたした。日直がわら半紙四分の一に切った十題テストの紙を配りかけたときである。

「チエッ。」



村治の舌が鳴った。

とたんに、目に見えない早さで、村治の指先から、とびだしたものがある。

「あつ、いたいっ!」

いっしゅん、ユカは、顔をしかめる。右ほおをおさえて、教卓にうつぶせになった。

村治は、いつも五、六本のわゴムをうでわにして、左のうでにまいている。このわゴムの指パチンコときたら、村治ほどの名人はいない。なにしろ相手をみないで横をむいても、ちゃんと的に当ててしまう。そんなときの村治は、「当てようと思わないけれど、つい当たっちゃうんだよ。」と、すましていいわけする。

「どうしたの?」

女の子の二、三人が「女王さま」のまわり

にかけよる。

「い、いいの。」

ユカは、よってきた女の子をしりぞけて、すかさず床の上からぼちっとしたものをひろいあげる。

「村チャンでしょ。ゆるせないわ。」

ユカの目は、こんどこそ、ぴたっと村治にむかった。まったく、するどい勘だ。

ユカは、いまほおに当てられた一このわゴムを、ぶらさげている。村治が、

「へへへっ。」

と、頭をかいて、ゴリラのまねをする。

と、たちまち男の子のあいだから、笑いのたつまき。

「ふ、ふふっ、わはっ、わーい。」

「村チャン！」

ユカは、そのさわぎの中で、とうとう村治の席へあゆみよってきた。実力行使にでたのである。

「どうしたのよ。わたしのどこがわるいの。なにか、うらみがあるの？」

ユカが、村治の前で、たてつづけに責めたてると、教室の中は、ふしぎにシュンとしずまってきた。

「う、うらみなんか……。」

村治は、そこでとまどった。

「そんなら、どうしていたずらするのよ。自信じしんないんでしょ。」

「なにが？」

「きまつてるじゃない。けさの十題テスト。」

「そ、そうだ、……そうなんだ！」

村治は、とっさに、いすの上に立ち上がった。

「そうなんだぞ。」

ビューンとつづけざまにうでをふり、村治は、ひとりで舌なめずりをしてうなずく。ぱつと勝ち目がひらめいたのだ。

「なにがそうなのか、早くいって。」

ユカは、いやおうなく村治を見上げてきく。

「そうさ、えらいことになったんだ。大事件だいじけんなんだぞ。」

「大げさなことって。」

「ほんとなんだ。もし、けさ、みんなが十題テストしたら、このクラスのうち、だれかが死ぬしかもしれないんだぞ。」

「村チャン、ほら、おどかしで、テスト逃げようとしてるのね。」

ユカはえたいも知れないものに鼻はなっ柱はしらをおさえられたようで、やきもきしてきた。